



ここまで来た! リアルタイムコミュニケーション基盤 Microsoft Lyncの威力

マイクロソフトが年内に発売する新UC基盤「Microsoft Lync」。従来のOCSから大きく進化し、リアルタイムなコミュニケーションの効率を改善することにフォーカスしている。

文 坪田弘樹 本誌

リアルタイムなコミュニケーションを支えるプラットフォームとはどうあるべきか。

マイクロソフトのユニファイドコミュニケーション(UC)基盤「Office Communications Server 2007(OCS)」の後継製品である「Microsoft Lync(リンク)」は、その点を徹底的に追求している。

各種のコミュニケーションツールを単一のインターフェースに統合し、さらにオフィスアプリケーションともシームレスに連携させるUC基盤と

しての機能は、すでにOCSの段階で実現されていた。09年春にリリースされたOCS R2では、課題であったPBX機能をテコ入れ、日常的に使っているOffice製品との連携という強みを活かしながら、電話機能の弱点を補強してきたその歩みは、本誌でも度々伝えてきた。

では、次なる進化はどういったものか。ひと言で言えば、リアルタイムに人と人をつなげるインスタントメッセージング(IM)と電話の使い勝手を高めることにフォーカスしたのがLync

である。

拡張されたプレゼンス機能

OCSとLyncの違いは何か。インフォメーションワーカービジネス本部・IWサーバー製品マーケティンググループ・エグゼクティブプロダクトマネージャの米野宏明氏は「最も大きい変化は、インターフェースを大幅に改善したこと、電話機能を強化したこと。この2点」と話す。

1点目のインターフェースについては、連絡を取りたい相手の状況を素早く詳細に把握できるよう、デスクトップクライアントの操作性、一覧性を向上させた。

図表1が、新しいコミュニケーショ



マイクロソフト・インフォメーションワーカービジネス本部IWサーバー製品マーケティンググループ・エグゼクティブプロダクトマネージャの米野宏明氏

ンククライアント「Lync 2010」だ。連絡先リストには、現在の状態を示す、緑・赤・黄のプレゼンスアイコンに加え、新たに顔写真が表示されるようになった。コミュニケーションを取る相手が増えた場合や、新たにコンタクトする相手を探すときに判別がしやすい。「業務時間外」などの横には、その状態になってからの経過時間も表示される。

もっと深い情報にも、ここから瞬時にアクセスできる。連絡を取りたい相手をマウスオーバーすると、「連絡先カード」が開く。図表1の左側に【高橋健吾】の詳細情報を表示している部分がそれだ。ユーザー情報を管理するActive Directory(AD)やOutlookなどと連携して、属性や居場所、予定など、プレゼンスを補完する情報が得られる。



【左:写真1】会議の終了時刻が分かれば確実に連絡が取れる。会議の内容がわかれば、電話では無理でもIMなら連絡がとれるといった場面もでてくるはずだ。【右:写真2】組織ツリーにはプレゼンス付きで上司や同僚などをリスト表示する。

図表1 統合コミュニケーションクライアント「Lync 2010」



例えば「会議中」であれば、終了予定時間が、情報の公開レベルによっては会議の内容もわかる(写真1)。また、組織ツリーを表示することも可能だ(写真2)。

この連絡先カードは、他のOffice製品でも表示される。メールの送信者や宛先欄、Outlookの予定表など、「人」が登場する場所にはどこでもプレゼンスアイコンが付き、名前をマウスオーバーすれば連絡先カードが開く(写真3)。なお、カードを切り離してデスクトップに置いておき、連絡を取りたい相手の状態を常にチェックすることも可能だ。

従来のプレゼンスで知ることができたのは、「今、連絡が取れるか取れないか」に過ぎない。クライアントも「プレゼンスが分かる電話帳」の域を出るものではなかった。もちろん、それでも有用には違いないが、Lyncでは「いつ、どの方法が一番確実か」さらには「誰に問いかけるのが最も適切か」といった判断に必要な情報が豊富に与えられる。

この拡張されたプレゼンスにより、IM、電話、Web会議を的確に使い分けられるようになった。リアルタイムコミュニケーションの効率を改善するLyncの第1のポイントがこれだ。

もうPBXは要らない

電話機能については、主に可用性の向上に焦点が当てられている。

OCSと同様、Lyncでも、他社のPBXとの連携・統合が可能で、ユーザー企業にとっても既設の音声インフラとの組み合わせが現実的な導入